

子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

News Letter

Vol. 12

1999.9.25

キャプナ ニュースレター

発行：子どもの虐待防止ネットワーク・あいち 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-404 TEL 052(232)2880 FAX 052(232)2882



「あなたは、子ども時代のわたし…。心を凍らせていた子ども時代のわたし…」
CAPNA 事務局の一角で、熱の入ったせりふ練習が続いています。

10月17日のCAPNA 4周年記念大会で披露される朗読劇「舞う雪に、さっちゃん
の歌が聞こえる」(脚本・祖父江文宏)の練習です。朗読劇のはずなのに、祖父江
代表の演技指導は「はい、そこでしっかりと抱き合って」と、気合たっぷり…。

電話相談員と、わが子を虐待してしまう母親、それを取り巻く専門職の人たち
が、入れ替わり登場します。まさにCAPNAの4年間の活動から生まれた創作劇で
す。ぜひお見逃しなく。

あなたから広がる虐待

10.17 CAPNA4周年記念大会へどうぞ

CAPNAの4周年記念大会は、コラムニストのジョン・ギヤスライトさんの講演会、祖父江文宏代表と仲間たちによる朗読劇と、見どころがいっぱいです。一緒に笑ったり、泣いたりしながら、私たち一人ひとりが、身近な子ども虐待を防ぐ道について、思いを新たにしたいと考えています。今回の大会は、例年の総会とは違います。CAPNAがいよいよ、一人前の組織になるための、NPO法人設立総会も兼ねています。そして、2,000年12月に名古屋で開かれる「子どもの虐待防止研究全国大会」への決意表明の場でもあります。

10月17日、名古屋市東区のウイルあいちへ。ぜひ、お仲間を誘ってお越し下さい。



ジョン・ギヤスライトさんの講演

中日新聞の連載コラムなどでおなじみのジョン・ギヤスライトさんは、アメリカ・オレゴン州生まれ、カナダ育ち。そして今は瀬戸の森の中で、弘子夫人と二人のお子さんと一緒に幸せな毎日を過ごしています。家の中に必要なもの。それは、夢と笑いとコミュニケーションだと、ジョンさんは言います。そして、こう呼びかけます。

子どもに「夢は何か」と聞く前に、大人自身が夢を持とう。

そしてその夢を子どもに語りかけよう。

そうすれば、自然に子どもは夢を膨らませる。

生まれたばかりのその夢を、大人が大きく育ててあげよう。

防止への道

CAPNAのあゆみ

ジョンさんは、子どものころから、いろいろな悲しみを体験してきました。そして家族のきずなの大切さも、人一倍実感してきました。虐待を受けてきた子も、いつも身近にいました。ジョンさんの強さ、温かさから、私たちはきっと多くのことを学ぶはずです。

朗読劇

出演者は、12人。ピンスポットだけが当たる舞台の上で、ドラマは静かに始まります。窓の外に降る雪を眺めながら、遠き日の自分を思い起こす女性。そこに響く電話のベル…。

果たして、その結末は——。CAPNA劇団の旗揚げ公演、になるかも？

- 1995 9月 電話相談開始（週2回）
- 10月 CAPNA 設立総会
- 1996 5月 電話スタッフ養成講座始まる
- 10月 1周年記念大会。斎藤學、恒成茂行両氏が講演
- 1997 1月 CAPNA 井藤団発足
- 8月 中区丸の内に事務所開設
- 10月 電話相談を全平日に拡充
活動報告集を出版・ロゴマーク、リーフレット作成
2周年記念大会。児童相談所との連携めざす
- 1998 2月 専門家向けセミナースタート
- 10月 「見えなかった死」出版・マスコミ取材殺到
3周年記念大会。はぐるま太鼓熱演。
- 11月 CAPNA ブックレット出版
- 1999 1月 日間賀島で初合宿
- 3月 「見えなかった死」シンポジウム
- 4月 電話スタッフ養成講座2期生修了
初の有給スタッフ誕生
- 5月 2000年大会へ、準備会立ち上げ
- 7月 祖父江代表が衆議院へ参考人招致
- 10月 4周年記念大会・NPO 法人設立総会

NPO法人格を申請します

4周年総会は、NPO法人CAPNAの設立総会も兼ねています。皆様のご承認をいただき、法律にもとづいた一人前の団体（法人）としてのスタートを切りたいと考えています。

昨年に行われたNPO法（特定非営利活動促進法）は、市民団体が所定の手続きを踏んで都道府県に申請し、その認証を受けて、法人格を得られると定めています。法人格を得ることによって、事務所などの財産を団体名義で所有でき、行政機関からの委託も受けやすくするなどの利点があります。将来的には、社会的に意義の大きい活動をしているNPO法人が、税制優遇の対象になる可能性もあります。これからの日本が市民主体の元気な社会になっていくために、NPO法人の力は欠かせません。愛知県内でも、社会福祉、街づくりなどの分野を中心に、NPO法人が次々に誕生しています。

私たちCAPNAも、弁護士や児童福祉司、教師、マスコミ関係者らによる準備委員会を発足させ、定款づくりなどに議論を重ねてきました。

CAPNAがここまで大きくなれたのは、子どもたちを守るために、コツコツと無償の努力を重ねてきたこと、時代の方向性を見つめて、的確な情報発信を続けてきたことが、社会に評価されたのだと自負しています。でも、まだまだ、一人前の組織ではありません。これからさらに、信頼される仕事を重ねていかねばなりません。皆様のご協力をよろしくお願いします。

祖父江代表、国会へ！

青少年問題特別委で熱弁



1999年7月21日は、私たちにとって記念すべき日となりました。祖父江文宏代表が、衆議院の青少年問題特別委員会に参考人として招致され、子ども虐待の問題について弁舌をふるったのです。子ども虐待が社会問題として政治の世界で認知され、政治家が本腰をあげなくてはならなくなったことを示すできごとでした。

随行員として祖父江代表とともに、国会に乗り込んだ私のレポートをお届けします。(運営委員 安藤 明夫)

40年ぶり

「国会なんて40年ぶりだぜ」

永田町に向かうタクシーの中で、祖父江代表は感慨深げにつぶやいた。

60年安保の熱い時代。彼は早稲田大で演劇を学ぶ学生だった。東大生・権美智子が死亡したデモの時も、国会周辺のデモの中にいたという。

かつてのデモ学生を、警備の人たちが丁寧な物腰で迎えてくれた。国会議事堂に隣接した分館の4階。第15委員会室に案内されると、壁に政治家の肖像画が並ぶ。永年議員の肖像画で、数えてみると14枚。たぶん各委員会室に分けて飾られているのだろう。入り口付近に掲げてあった宮沢喜一の油絵は本物よりもかなり威厳があった。

委員会室は、裁判所と会議室を合わせたような造りだ。一段高い委員長席を囲むように、Uの字型に委員たちの席が並び、壁に接して、調査官、事務官などが座る席がある。Uの字の中央には、速記の人たちが座る掘りごたつのような席。後ろの傍聴席には、マスコミ関係者も数人、顔を見せていた。

参考人として招致されたのは、祖父江代表のほか、東京弁護士会の平湯真人さん、大阪中央児童相談所の津崎哲郎さん。議長席の横に参考人のいすが並べられていた。随行員の私は、祖

父江の後ろに長机といすを与えられた。

35人の委員の中には、元ドラゴンズの三沢淳、盗聴騒ぎで有名になった保坂展人、タレント教授だった松浪健四郎など、政治オンチの私が顔を知っている人も数人いた。

政治家の責任

午前9時過ぎに開会。まず、参考人が一人あたり15分の持ち時間で、議員たちに説明をした。

トップバッターの平湯参考人は、諸外国の例を挙げつつ「虐待に気付いた教師や医師たちが通報を躊躇してしまう」「児童相談所の立ち入り調査権が機能しにくい」「子どもを家に帰すか、親から保護するかの二者選択で、その中間がない」「親のカウンセリング、治療をうながす制度がない」といった法の不備を訴えた。そして、虐待問題に対する社会の理解の乏しさが、解決を難しくしていることを強調した。

続いて津崎参考人は、児童福祉司が人口10万人あたり一人しか配置されていない現実を訴え、出前型のサービスを充実できるような児童相談所の体制を求めた。また、子どもの救援と、親との関係づくりという矛盾する仕事を両立させなければならない難しさを訴え、機能を分ける必要があると話した。

最後に登場した祖父江参考人は、CAPNAの活動

を説明し、子どもの救済のネットワークには、さまざまな段階があること、その段階に応じた官民の役割分担と連携が必要であることを訴えた。さらに、養護施設の現状について、昭和22年に設けられた施設基準がほとんど改善されないまま現在に至っていることなどを説明した。

少子化対策として保育園の充実などに多額のお金をかけてはいるが、虐待を受けた子どもたちの「救済の場」であるはずの施設には、ほとんど光が当たっていないという問題を、国会で初めて訴えたわけだ。

強烈なひとこともあった。

「児童虐待は今起きた問題ではない。失礼ながら、先生方がやるべきことをやってこなかった結果が今に現れているのだと思う。その責任をよく考えていただきたい」

続いて国会議員からの質問に入った。本会議と同様に、発言席の議員が「議長！」と挙手した後、指名を受けて発言し、参考人もいちいち「祖父江君」とか「津崎君」とか呼ばれてから発言する。慣れないとまどろっこしいが、一種の形式美も感じた。

答弁ごっこ

先頭の河村建夫議員は温厚そうなおじさん。自民党の代表質問なので、かなり時間をとって、いろんな角度から聞いてきた。

三人の参考人のチームワークはなかなかのもので、津崎参考人が行政の課題を示すと祖父江参考人が市民の側から補足し、平湯参考人が法制度の面から踏み込むというパターン。

私も少しだけ参加した。虐待の通告義務をどう社会に啓発すればよいか、という質問があったので、祖父江代表にこんなメモを渡したのだ。「行政のパンフだけではだめ。マスコミをうまく使うことが大事」祖父江代表は意を汲んで、うまく話してくれた。「政府答弁ごっこ」は楽しかった。

時間がたつにつれて、居眠りをする議員が目立ち始めた。この問題、関心のある人とない人



の差は明確だ。

さらに質問は、肥田美代子（民主）、石毛えい子（民主）、池坊保子（明改）、大森猛（共産）、保坂展人（社民）の各氏と続いた。さすがに質問者はみんなよく勉強しており、議員立法の可能性も考えているようだ。

最後の方になると、質問者の持ち時間が15分しかなく、参考人の答が長くなると、二つ程度の質問で終わってしまう。やはり、議席数が少ないと大変だ。しかし、この人たちが委員会の中で虐待問題の深刻さを訴え、政治議題に挙げたのだろうと想像できた。その背景には、全国各地の市民団体の取り組みや、マスコミのキャンペーンがあったのだろう。

保坂議員は「これはスタートに過ぎない。一回だけやって終わりでは、政治家の責任放棄と言われても仕方がない」と締めくくった。壁の時計は正午を少し回っていた。

政治議題に

想像した以上に、中身の濃い話し合いだった。虐待問題に真剣に取り組んでいる議員たちがいることが分かり、心強かった。傍聴していた厚生省の虐待問題専門官、前橋さんは「児童虐待が初めて、国政の場で政治議題として認知された日だと思います。それにしても、祖父江さんのひとは痛快でした」と笑った。

外に出ると、じりじりと真夏の日差しが照りつける。遠くから、国歌国旗法案の衆院通過に抗議するデモ隊の声が響いていた。

子どもに寄り添い、守ろう

CAPNA保育者セミナーから

CAPNAの専門職向け虐待防止セミナー「保育者セミナー」が8月8日、名古屋市東区のウィルあいちで開催されました。ふだん、保育の現場で多くの子どもと接している保育者を中心に41人が参加。青山学院大学教授・庄司順一氏（日本子ども家庭総合研究所）が「保育現場における虐待の発見と対応」をテーマに講演した後、保育者たちが実際に体験した事例をもとに、虐待問題に対して保育者たちが何をできるかを話し合いました。庄司氏の講演要旨を紹介します。



私は乳児院で働いていたとき、1歳1ヵ月で体重7kgの子どもに出会いました。遊んであげようと近づくと、手で目を隠すのです。親という、子どもにとって一番身近な人から苦痛を与えられた結果、人を恐れるようになってしまったのでしょうか。そのとき、子どもにとって安心して人と愛着関係を結べる環境というのがいかに大事かを痛感しました。

今、子育てに不安を感じる母親は多いです。ほとんどは「子どもといると楽しい」と答えています。でも、同時に悩みや怒り、不安、負担感も感じており、孤独感にさいなまれたりもしています。その延長線上に虐待が生じてしまうこともあります。

虐待とはいったい何なのでしょう。それを考えるには、子どもの視点に立つことが重要です。子どもにとって有害かどうかを判断基準にすべきです。今までは親の側に立ちすぎて、子どもの立場で考えるとどうか、といった視点が抜けていたように思います。実際に苦痛を受けたり、明らかに心身の問題が生じている状態のみならず、明らかに危険が予想される場合も視野にいれるべきだと考えます。

1996年、アメリカでは子ども虐待の通報件数は310万件でした。保育者や教師など、子どもに関わる職種や医師などには子ども虐待の通告義務が課されています。通告を怠れば、刑罰の対象になります。通告義務は守秘義務以上に重視されています。また、外国では何か特徴的な事件があると、徹底的に調査が行われ、制度が変わったりしますが、日本では事件が忘れられるのを静かに待つといった感覚があります。私は以前、乳児院から自宅へ戻った子どものうち、何人が家庭で死亡したのかについて調査を行ったことがあります。5年間で10人、疑わしいケースも含めると13人の子どもが死亡していました。このような実態は、もっともっと多くの人に伝えていかねばなりません。

虐待の発生の要因はいろいろ考えられますが、虐待に向かうリスク要因があったとしても、その要因をもつ人がすべて虐待者になる、ということはないのです。虐待を受けた経験があっても自分の中で整理できているとか、夫や地域の支えがあるとか。虐待のリスクを補償する要因に注目し、それらを強化していく試みが大切です。

保育の現場で虐待を目にした時、最初にとまどうのは「本当に虐待と言ってよいのだろうか」ということでしょう。疑いでもけっこうです。早めに児童相談所に連絡してください。「通告」ではなく、「相談」という形で知らせるという手もあります。児童相談所は対応することになっています。虐待の兆候で、これがあるから100%虐待、と言えるものはないのです。保育者として「何かおかしいな…」と思う直感、経験に基づく判断を大事にしてください。表情、あざもちろん、不規則に保育園を休むというのも危険と考えてください。殴った跡がみえるうちは保育園に行かせない、休んでいるために発見が遅れてしまったということが実際あるからです。

発見され、保護された子どもに対し、保育園は在宅でのケア、施設退所後の支援の場として関わることができます。子どもが安心できる、安全であると感じられる環境をつくることができます。保母さんとの関わりを通して愛着関係の体験をすることもできます。保育園は常に子どもに寄り添い、モニターの役割を果たすことができる重要な機関です。

虐待は非常に複雑な問題で、1個人・1機関で対応できるものではありません。これからは子どもに関わる機関がどう連携して子どもを守っていくのか。そのうえで保育園はどのような役割を果たしていけるかを皆で考えていくことが大事だと思います。

あなたに とどけ

"よーしこちゃあーん" 縁側の向こうに遊び仲間の白い歯が誘う。下駄をつっかけ手を取りあつて秘密の基地へ駆けていく。日陰の黒い土にこぶしほどの穴を掘り、それぞれの宝物をそっと入れる。拾ったガラスの破片で蓋をして土をかけ、目印の草花を立てる。自慢のカブト虫の死骸・おばあちゃんにもらった色鮮やかなはぎれなどなど。地面に大きく四角や丸を描き、ケンケンパー ケンパー ケンパー ケンケンパー。

日暮れて"ことりがくるからかあーえろ"。私は「ことり」は小鳥だとずーつと思っていたが、ある日それは「子捕り」だと知り一目散に家に帰った。セピア色の思い出は、大地の温もりと風のそよぎを裸足で全身で感じ取り、とても満たされていた。泣いて笑って自然と人ととけあつた。さまざまな痛みも知った。

ひとりぼっち 田島 淑子

そして今。子どもたちの喚声はほとんど聞こえてこない。みんなどこにいるのお？ 鼓動する大地はコンクリートで身を固め、雨も風も白々と反射する。人もまた、厚い靴底でわずかに残る大地とのふれあいを拒否してしまった。装う・整うという名のもとに豊かな感受性を封じ込めたように思えてならない。

手をつなぎあえず孤立しやすい世の中・生きづらい現実。子どもを育てるってとても「ひとりぼっち」を感じる孤独なことだと思う。どんなに疲れても、思うようにならなくても"やーめた"とピリオドは打てない。

ねえあなた 一人で悩まないで！ 一人で苦しまないで！！

一緒に話そうよ。考えようよ。ホットラインのこちら側でわたしたち、あなたを待っていますから。けっしてひとりぼっちじゃないから ね ね。



2000年大会の分室ができました

2000年12月に名古屋で行われる子どもの虐待防止研究全国大会に向けて、大会事務局分室が9月にオープンしました。これから編集作業や会議などが増え、CAPNA事務所が手狭になるため、思いきって専用スペースを持つことにしたのです。

新事務所は、CAPNA事務所から徒歩2分の至近距離で、ビルの三階にあります。日当たりが良く、ゆったりしたスペースです。ボランティア志望の皆様にも、これからどんどんお仕事をさせていただけるかと思えます。「2000年大会の編集作業や事務仕事を手伝ってみたい」と思われる方、CAPNA事務所にご連絡ください。

お知らせ

○ 市民講座「援助するということ」

10月28日午後6時30分から、名古屋市中区大井町、名古屋市女性会館で。小児科看護の経験が長いCAPNA広報スタッフの水戸加奈子さん（中部労災病院看護専門学校専任教員）が、援助する側、される側の関係性と、子ども虐待の問題について話します。

○ 虐待研究に助成金

9月13日、東京の安田生命社会事業団より「子どもの虐待の基礎研究」（研究者代表・祖父江文宏）として助成金50万円をいただきました。昨年秋に出版した「見えなかった死—子ども虐待データブック」で、日本の虐待死の現状を初めて包括的に調査、分析した活動が評価されたものです。2000年大会に向けて、継続的な虐待死調査のために活用します。

○ 水戸事務局次長にTARG賞

水戸憲一事務局次長（28）が、名古屋青年会議所のTARG賞を受賞しました。同賞は、名古屋市内で社会貢献活動をしている20代、30代の若者に贈られる賞で、ことしの受賞者は、水戸次長と、アジア保健研修所事務局長の佐藤光さん、日本舞踊西川流師範の西川まさ子さんの3人です。

CAPNAニューズレター12号

編集人 祖父江 文宏
1部 200円

発行 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち
〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-4-404
TEL 052(232)2880 FAX 052(232)2882



子どもを「かわいい」と思えない
カッとしてみ手を上げてしまう
虐待されている子が、近所にいる
虐待を受けた記憶に苦しんでいる
ほくは（私は）虐待を受けている
育児に疲れた。私はダメな母親だ

CAPNAホットラインをご利用ください

052-232-0624

平日 AM10～PM 4 研修を積んだスタッフが対応。
木曜日は東海市（0562-36-0624）でも受け付けます。